

バットージディークシタの祭事哲学 —文法学派ダルマ論のヴェーダ思想による裏づけと権威づけ*

川村 悠人

1 本稿の目的

本稿は川村 2017b の続編である。川村 2017b では、初期の文法学者カーティアーヤナ（紀元前 3 世紀頃）とパタンジャリ（紀元前 2 世紀頃）が繰り広げるダルマ論（*dhamra* 「正しい行い、そこから得られる潜勢力、効力、功德」）を、先行するヴェーダ思想との繋がりに配慮しつつ、分析した。そして、両文法家が、ダルマの概念を言語運用の領域に取り入れてヴェーダ祭式の世界と日常の言語運用の世界を重ね合わせることにより、祭式行為に変わる、功德（*dharma*）を積んで繁栄（*abhyudaya*）を得る手段として、日常世界における正しい言語使用を提起していることを結論部において指摘した¹。

本稿では、バットージディークシタ（16 世紀後半–17 世紀早紀）が文法学書 *Śabdakaustubha* 「ダルマ章」（*sādhuśabdaprayogād dharmotpattinirūpaṇam* 「正しい言葉の使用に基づいて功德が生起することの確定」章）において見せる論述を手掛かりに、文法学派のダルマ論をヴェーダ思想との関連からさらに掘り下げてみたい。当該の章ではカーティアーヤナとパタンジャリが残した所言がダルマ論の枠組みの中で取り上げられ、議論される。そこには聖典解釈学ミーマーンサーからの影響も色濃く見られる。以下、バットージの立論を追っていく²。

2 知識に裏づけられた言葉使用に起因する功德と繁栄

2.1 根拠 1—カーティアーヤナ、パタンジャリ、シャバラ、クマーリラの諸言明

2.1.1 カーティアーヤナ

功德（*dharma*）は何から生じるかという問いに対して、カーティアーヤナは自身の定説を次のように述べた。

vt. 9 (Paspāṣā): *sāstrapūrvake prayoge 'bhyudayas tat tulyaṃ vedaśabdena* |

「文法学 [の知識] を前提として言語使用がなされるとき、繁栄がある。それはヴェーダの言葉と同じである」

*本稿は JSPS 科研費 15J06976 の助成を受けたものである。

¹日常生活における正しい言語使用が功德をもたらすとカーティアーヤナとパタンジャリが考えていることは、川村 2017b: 108–109 (§4.3) で見た、日常世界の祭式世界との対比から分かる。そこでは日常世界が対比の対象として明示されているわけではないが、ヴェーダの祭式世界（*vaidika*）と対になって理解されるのが日常世界（*laukika*）であることは明白である。ヴェーダ世界で妥当する祭式の果の獲得構造と対比されるべきは、言うまでもなく日常世界で妥当する果の獲得構造であり（パタンジャリの第一解釈）、ヴェーダ語に妥当する効力発揮の構造と対比されるべきは、日常世界で使用されるサンスクリットに妥当する効力発揮の構造である（パタンジャリの第二解釈）。これは Cardona 1990; 1999 では考察されなかった点である。

²カーティアーヤナ並びにパタンジャリとバットージの間には重要な文法家としてバルトリハリが位置するが、バットージが *Śabdakaustubha* 「ダルマ章」においてバルトリハリの論に言及することはない。またバルトリハリのダルマ論については Aklujkar 2004 などに詳述されている。したがって、本稿では特に触れない。

この vārttika は、功德とそれに基づく（天界での）繁榮 (*abhyudaya*) は正しい言葉の知識 (*jñāna*) だけからは得られないこと、それは正しい言葉の知識をもって正しい言葉を使用するときに (*prayoga*) はじめて得られるものであると断言する。ここでカーティアーナは「功德」(*dharma*) という言葉を用いていないが、議論の文脈から、パタンジャリと同様、「功德の積重 → 繁榮の獲得」という流れを彼も想定していると考えてよい³。バットージは上記の vārttika を以下のように説明する。

ŚK (26.1–2): *prayogaśabdāṃ upādādāno vārttikakāraḥ prayogād dharmo na tu jñānamātrād iti sūcayati* |

prayoga 「使用」という語を述べる時、Vārttika 作者（カーティアーナ）は、[正しい言葉の] 使用から功德があるのであり、[正しい言葉を] 知っているだけでは [功德はない]、ということを示唆している。

功德（とそれに基づく繁榮）は言葉の知識からではなく言葉の使用から生じる。このカーティアーナの提言をバットージは文法学派の定説として受け入れ、以下、彼はその妥当性を証明していく。

2.1.2 パタンジャリ、シャバラ、クマーリラ

バットージは、言葉の知識は言葉の使用に従属するものであり、前者だけから望ましい果 (*phala*) は生じないことを説示する。

ŚK (26.2–8): *yuktaṃ caitat | ekaḥ śabdaḥ samyakjñātaḥ suprayukta ity atra jñānaprayogayor upādānasyāvīśeṣe 'pi pratipadādhikaraṇanyāyena yadaikasmād apūrvaṃ tadetarat tadartham iti prayogāt phalaṃ jñānaṃ tu tadaṅgam ity abhyupagamāt | prayogasya phalam prati sannihitatvāc ca jñānasya tu vyavahitatvāt | jñānasya prayogaṅgatāyāṃ dṛṣṭārthatālābhāc ca | uktaṃ ca bhāṭṭaiḥ*

*sarvatraiva hi vijñānaṃ saṃskāratvena gamyate |
parāṅgaṃ cātmavijñānād anyatrety avadhāryatām || iti |*

そして以上のことは適正である。

「一つの言葉でも、正しく知られ、正しく使用されるならば—」というこの [聖句] 中で、[正しい言葉の] 知識と使用の言及には違いがないとしても、「各語から」論題における論理に従い、一つものから *apūrva* があるとき、他方のものはそれを目的とするもの（それに従属するもの）であるから、[正しい言葉の] 使用から果がある。一方で知識はそれ（言語使用）に従属するということが認められているから。また [言語] 使用は果に近接しており、一方で知識は [言語使用に] 介在されているから。また知識が [言語] 使用に従属するとき、知識の果は見られないから。

バッタ派の者たちも言っている。

実に、いかなる場合でも、認識は浄化するものとして理解され、他に従属するものである。アートマンの認識を除いて。以上のように確定されよ。

パタンジャリが引く聖句「一つの言葉でも、文法学に従って正しく知られ、正しく使用されるならば、それは天上界において如意牛となる」(*ekaḥ śabdaḥ samyakjñātaḥ śāstrānvitah suprayuktaḥ*)

³川村 2017b: 106–108 (§§4.1–4.2) を見よ。

svarge loke kāmadhug bhavati) の典拠は不明であるが、ミーマーンサー学派のクマーリラ (600–650 年頃) は、これをヴェーダの言葉として掲げ、正しい言語使用について考察している (針貝 2015: 25–27 [§1.2])⁴。少なくとも当該の聖句では、字面上、正しい言葉の知識と使用は同程度に扱われており、両者の主と従は示されていない。ならば、パタンジャリが引用するこの聖句は、正しい言葉の知識に裏づけられた言語使用によってのみ功德は得られるという主張と噛み合わないものとなる。当該の聖句は、言葉の知識からも功德が生じ得る可能性を残すからである。この問題を解決すべく、バットージはここに聖典解釈学派シャバラスヴァーミン (500–560 年頃) の理論を持ち出して来る。Mīmāṃsāsūtra 2.1.1–4 に対する Śābarabhāṣya は三つの論題から構成され、そのうち、有益な対象 (*artha*) であるダルマを表示するのは各語か一語かを問う第一論題が伝統的に「各語から」論題 (*pratipadādhikaraṇa*) と呼ばれるものである⁵。バットージが言及しているのは、同論題中でシャバラが *apūrva* の単一性を確立するために述べる「一つのものから *apūrva* があるとき、他のものはそれを目的とするもの (それに従属するもの) となるであろう」 (*yadāikasmād apūrvam tadetarat tadarthaṃ bhaviṣyati*) という理屈である⁶。正しい言葉の使用から功德が生じることが上に挙げたカーティアヤナの言から確立しているとき、当該の理屈に依拠して、言葉の知識を常にその従属要素と見なすことができる。そのような場合、言葉の使用からのみ功德が生じるという主張を正当化できることになる (*prayogāt phalam*)。

次にバットージはクマーリラの理論に立脚して、言葉の知識は言葉を浄化するものとして言葉の使用に常に従属すること、故に果を直接的にもたらすのは言葉の使用であるから言葉の知識は個別の果をもたないことを説いている。言葉の知識は常に言葉の使用に介在される (正しい言葉の知識 [*vyavahita*] → 正しい言葉の使用 [*sannihita*] → 果)。バットージがバツタ派のものとして挙げる詩節は、クマーリラの *Tantravārttika* から引用されたものである (TV [304.3–4])。クマーリラは、正しい言葉の知識は言語使用者の言葉の浄化に役目を終えるから、知識がそれ以外に何らかの果をもたらすことはあり得ないとする。

TV (304.2): *jñānasya tu puruṣaśabdasaṃskāratvena nirākāṅkṣasya phalasambandhāsambhavāt |*

一方、知識は人の言葉を浄化するものとして充足するので、それが [他の] 果と結びつくことはあり得ないから。

クマーリラはこの後にバットージが引く詩節を掲げて、アートマンの認識を除く認識は、他者を浄化する役割を果たすものとして、その他者に従属することを主張しているのである⁷。以下の一節にはクマーリラの結論が集約されている。

TV (304.24–25): *śabdajñānasya tv ekāntena prayogāṅgatvāt pūrvatarabhāvitvāc ca na prthakphalasambandhasambhava iti jñānapūrvaprayogaphalavattvam eva niścīyate |*

⁴当該の言明の解釈については川村 2017: 110 (§5) を見よ。

⁵片岡 2011: 250 を見よ。当該箇所 *Śābarabhāṣya* に対する訳注が片岡 2004: 102–103 にある。

⁶ŚBh on Mīmāṃsāsūtra 2.1.1 (48.2–3): *yadāikasmād apūrvam tadetarat tadarthaṃ bhaviṣyati | evam alpīyasy adṛṣṭānūmānaprasaṅgakalpanā bhaviṣyati | tasmād ekam apūrvam ||* (片岡 2004: 103.3–7: 「もし一つから新得力 (*apūrva*) があるなら、他はその [一つ] を目的とすることになる。このように [考えるなら] 未見対象の推論が帰結するという想定 (*adṛṣṭānūmānaprasaṅgakalpanā*) は少なくなる。したがって新得力は一つである」)

なお、シャバラにおいて *apūrva* が何を意味していたかについては議論がある。吉水 1995; 1996 および Yoshimizu 2000、最近の論考では吉水 2012b: 19–34 (§§4.1–4.4) がこの問題について詳論している。それによれば、シャバラの段階では、*apūrva* は個人に先立ち存在する祭式の「新たな範型」であったが、クマーリラに至って、それは個々人のアートマンに存する「可能性」 (*śakti*)、いわゆる「新得力」へと概念が転換される。

⁷ミーマーンサー学派におけるアートマンの認識の位置づけについては針貝 1990: 133–145 を参照せよ。

しかし、正しい言葉の知識は例外なく言語使用の従属要素であるから、そして〔言語使用〕より前に起こるものであるから、それが個別に果と結びつくことはあり得ない。したがって、まさに知識を前提とする言語使用に果があることが決定される。

バトージがクマーリラの論議を念頭に置いていることは明らかである。

2.2 根拠2—ヴェーダ文献の諸言明

続いてバトージは、知識に裏づけられた言葉の使用から功德が生じるという構造の妥当性を、ヴェーダの聖句を引用することで証明する。

ŚK (26.9–16): *ata eva tarati brahmahatyām yo 'śvamedhena yajate ya u cainam evaṃ vedetyādiṣv api jñānapūrvakānuṣṭhānāt phalam ity eva siddhāntaḥ | tad uktaṃ vārttikakṛtā—tat tulyaṃ vedaśābdeneti | vedaḥ śabdo vidhāyako yasyārthasya aśvamedhādes tenedaṃ tulyaṃ ity arthaḥ | . . . te 'surā iti pūrvodāhṛtaśrutir api apaśabdaprayogāt pratyavāyaṃ bodhayantī sādhiprayogād dharmaṃ gamayati | vājasaneyinām brāhmaṇe—tasmād eṣā vyākṛtā vāg udyata iti śrutir apy evaṃ |*

まさにこれ故、「馬祭祀によって祭る者、そしてこれ（馬祭祀）についてこのように知っている者は、婆羅門殺しを乗り越える」などにおいても、知識を前提とした〔祭祀〕実践に基づいて果があるということこそが定説としてある。そのことは Vārttika 作者により「それはヴェーダの言葉と同じである」と言われた。言葉であるヴェーダが規定する馬祭祀などといった対象〔が持つ構造〕、それと問題のこと（言葉の知識を前提として言語使用をなすときに果があるという構造）は同じである。以上の意味である。

「その魔神らは」という先に例示された聖句もまた、咎が正しくない言葉の使用に起因することを知らしめることで、功德が正しい言葉の使用に起因することを理解させている。

Vājasaneyin 派の Brāhmaṇa にある「それ故、この〔我らの〕言葉は形成された形で話されている」という聖句も同様である。

2.2.1 例1—馬祭祀の果

第一に例示されるのは、Taittirīya-Saṃhitā に説かれる馬祭祀の果の獲得構造である。

TS 5.3.12.1–2 (II.54.15–18): *sārvam vā etēna pāpmānaṃ devā atarann, āpi vā etēna brahmahatyām atarant. sārvam pāpmānaṃ tarati tāratī brahmahatyām yò 'śvamedhēna yajate yā u cainam evaṃ véda.*

これ（馬祭祀）を通じて全ての咎を神々は乗り越えたのだ。また、これ（馬祭祀）を通じて婆羅門殺しを〔神々は〕乗り越えたのだ。馬祭祀によって祭る者、そしてこれ（馬祭祀）についてこのように知っている者は、全ての咎を乗り越える。婆羅門殺しを乗り越える⁸。

神々が馬祭祀を通じて罪を克服したという神話的知識をもった上で⁹、馬祭祀を挙行するとき、祭主は罪の克服という果を得る。それと同様に、正しい言葉の知識のもと言葉の構造と意味の実質をおさえた上で言語使用をなすとき、言語使用者には望ましい果が約束される（功德の蓄積と

⁸古伝承文献 (*purāna*) には、神インドラの婆羅門殺しの罪を、聖仙たちが馬祭祀を催すことで清めたとする神話が伝わる（小山 1979）。

⁹*yā evaṃ vidvān / véda* 「このように知っている者は」という語法が用いられるとき、知っている内容は神々の物語であることが多い。天野 2016: 37–39 (§4.1) を参照せよ。

繁栄の獲得)。バトージによれば、これがカーティアーナが述べた *tat tulyam vedaśabdena* という言葉の意味である。ヴェーダ文献が規定する、祭事世界で妥当する祭式の果の獲得構造と、日常世界で妥当する言語使用の果の獲得構造の対比である¹⁰。

なお、このバトージの議論もまた、同じ TS 5.3.12.1-2 を引きつつ知識のみから望ましい果が生じることの不合理さを説く以下のクマーリラの論を下敷きにしていることは疑い得ない。

TV (303.29-34): *yathā yo 'śvamedhena yajate ya u cainam evaṃ vedeti jñānamātrād eva brahma-hatyātaraṇaṃ yadi sidhyet ko jātu cid bahudravayavyāyāsasādhyam aśvamedhaṃ kuryāt | tad-vidhānaṃ cānarthakam eva syāt | evaṃ śabdajñānāc ced dharmāḥ sidhyet ko nāmānekatālvādivyā-pārāyāsakhedam anubhavet | tasmāt kratuvad eva jñānapūrvaprayogasyaiva phalam |*

例えば、「馬祀祭によって祭る者、そしてこれ（馬祀祭）をこのように知っている者は—」と〔規定されるとき〕、単に知識だけで婆羅門殺しを乗り越えることがもし成立するならば、いかなる人が多くの祭物の消費や労力を要する馬祀祭をなすだろうか。そしてそれ（馬祀祭）の〔実行〕命令が全く無意味なものとなってしまうであろう。

同様に、もし言葉の知識に基づいて功德が成立するとするならば、一体誰が口蓋などを多様に働かせる労力に起因する疲労を味わうだろうか。それ故、祭式と全く同様に、〔言葉の〕知識を前提とする言語使用にこそ果はある。

2.2.2 例 2—魔神の逸話

バトージは、自らの立論を補強すべくヴェーダ聖典からさらに 2 例を引き合いに出す。一つ目は、Śatapatha-Brāhmaṇa に語られる魔神たちの逸話である。

ŚB 3.2.1.23-24 (235.7-10): *té 'surā ātavacaso he 'lavo he 'lavo iti vādantaḥ pārā babhūvuḥ || tātrāitām āpi vācam ūduḥ | upajijñāsyām. sā mleccḥās. tasmān nā brāhmaṇo mleccḥed. asuryā haiṣā vāg. evām evāiṣā dviṣatām sapātnānām ā datte vācam tē 'syāttavacasaḥ pārā bhavanti yā evām etād vēda ||*

その魔神らは〔正しい〕言葉をとられ、*he 'lavo he 'lavo* 「ああ敵だ、ああ敵だ」と口にして滅び去った。その際に¹¹、この不明瞭な言葉をも彼らは口にした¹²。それは野蛮な言葉である。それ故、婆羅門は野蛮な言葉遣いをするべきではない。こうした言葉は魔神らのものである。これ（言葉 [vacas]）についてこのように知る者は、全く同様に、敵対する競争者たちの言葉をとる。彼（祭主）にとり、彼ら（競争者たち）は言葉をとられて滅び去る。

ここで、崩れた野蛮な言葉（方言、地方語）は魔神たちの言葉であり、婆羅門はそのような言葉を使用すべきでないとされている。よく知られているように、パタンジャリは当該の逸話を文法学習の目的を説くのに利用している。

MBh (Paspasā) [I.2.7-9]: *te 'surā helayo helayo iti kurvantaḥ parābabhūvuḥ | tasmād brāhmaṇena na mleccḥitavai nāpabhāṣitavai | mleccḥo ha vā eṣa yad apaśabdaḥ | mleccḥā mā bhūmety adhye-yam vyākaraṇam ||*

¹⁰この解釈は、カーティアーナの当該の表現に対してパタンジャリが提示した二つの解釈のうち、第一解釈に当たる。川村 2017b: 108-109 (§4.3.1.1) を見よ。

¹¹「正しい言葉をとられた際に」と解する。

¹²当該の *āpi* は、「魔神たちは、言葉をとられる前に使っていた正しい言葉に加えて、それをとられた後には崩れた言葉を使用した」という意味を示すものと解釈できる。

その魔神らは *helayo helayaḥ* 「ああ敵だ、ああ敵だ」と発して滅び去った。それ故、婆羅門は野蛮な言葉遣いをしてはならない、[すなわち] 誤った言葉遣いをしてはならない。誤った言葉であるもの、それは野蛮な言葉なのだ。野蛮人となってしまうことがないよう、文法学が学ばねばならない¹³。

バトージによれば、崩れた言葉の使用が罪悪の原因であることを伝える問題の逸話は、正しい言葉の使用が反対に功德の原因であることを間接的に知らしめるものである。Śatapatha-Brāhmaṇa の例は、功德をもたらす言葉の使用が知識に裏づけられるべきことを示してはいないが、少なくとも言葉の知識からではなくその使用から功德が生まれることを示すのに一役買っている。

2.2.3 例3—形成された言葉

最後の例についてバトージは「Vājasaneyin 派の Brāhmaṇa」と出典を明記するが、Śatapatha-Brāhmaṇa に当該の言明は見当たらないようである。代わりに Taittirīya-Saṃhitā に同種の一節が見つかる。もちろん、バトージが現存しない何らかの Vājasaneyin 派 Brāhmaṇa の言葉を引いている可能性はあるが、便宜上、以下では Taittirīya-Saṃhitā の一節をそれに代置して議論を進める。

TS 6.4.7.3 (II.204.3–8): *vāg vai pārācy āvyākṛtāvadat, té devā indram abruvann. imāṃ no vācam vyā kurvīti . . . tām indro madhyatō 'vakrāmya vyākarot. tasmād iyāṃ vyākṛtā vāg udyate.*

言葉は、顔を背けて¹⁴、形成されないままに話していたのだ。その神々はインドラに言った。「この我らの言葉を形成せよ」と。… それ（言葉）の間（内側）にインドラは歩み入り、それを形成した。それ故、この[我々の]言葉は形成された形で話されている¹⁵。

¹³ 当該の Śatapatha-Brāhmaṇa 及び Bhāṣya の節については Gotō 1987: 252–253、Cardona 1990: 3–5 (§3.3)、尾園 2015: 80–81 (§1.2.2); 85–86 (§3.2.1) などに翻訳と解説がある。

Śatapatha-Brāhmaṇa と Mahābhāṣya の間には若干の異説がある。すなわち、Mādhyandina 本 Śatapatha-Brāhmaṇa では *he 'layo he 'layaḥ* ではなく *he 'lāvo he 'lāvaḥ* (Kāṇva 本では *hailō hailāḥ*) が、さらに *mlecchitavai* ではなく *mlecchet* (Kāṇva 本では *mlecchitavyām*) が使用されている。Cardona 1990: 4.24–28 with note 11 によれば、*he 'lavo he 'lavaḥ* の正規形は *he3arayo he3arayāḥ* であり、*r* 音と *y* 音の代わりに *l* 音と *v* 音が使用されている点並びに延長母音 (*pluta*) が用いられていない点（それ故 *-e + a-* が形態的変化を被っている点）に前者の欠陥がある。いずれにせよ、*he 'lavo he 'lavaḥ* は（東方の）方言形・中期インド語と目される (cf. Thieme 1938 [1966]: 4、Gotō 1987: 252–253、尾園 2015: 80–81 [§1.2.2])。 *mlecchitavai* と *mlecchet* に大きな意味の違いはない。

パタンジャリの読み *he 'layo he 'layaḥ* は、正規の *r* 音の代わりに *l* 音が用いられている点に顕著な地方語的特徴を含み、このため文法学者たちにより崩れた言葉 (*apabhraṃśa*)、誤った言葉 (*apaśabda*) と見なされる。上に挙げた Bhāṣya は、当時横行していた中期インド語、いわゆるブラークリット語の使用を婆羅門に対して禁じたものである。

¹⁴ Thieme 1982–1983: 23.34 が括弧で補うように、「顔を背けて」には「我々には理解できない仕方で」(ununderstandably) という意味が意図されているであろう。次の *āvyākṛtā* 「形成されないままに」は、そのような理解し難い様を具体的に描いたものと解釈できる。

¹⁵ 当該の神話には、最古の文法家としてのインドラの姿が見られる (Weber 1876: 192, note 1; Oldenberg 1885: 58, note 1)。Scharfe 1977: 80 も指摘するように、インドラの文法学との関わりは Mahābhāṣya に語られる以下の神話にも観察される。MBh (Paspasā) [I.5.23–27]: *athaitasmiñ śabdopadeśe sati kiṃ śabdānām pratipattau pratipadapāṭhaḥ kartavyaḥ | gaur aśvaḥ puruṣo hastī śakunir mṛgo brāhmaṇa ity evamādayaḥ śabdāḥ paṭhitavyāḥ | nety āha | anabhyupāya eṣa śabdānām pratipattau pratipadapāṭhaḥ | evaṃ hi śrūyate | brhaspatir indrāya divyaṃ varṣasahasraṃ pratipadoktānām śabdānām śabdapārāyaṇaṃ provāca nāntaṃ jagāma | brhaspatīś ca pravakten-draś cādhyetā divyaṃ varṣasahasraṃ adhyayanakālo na cāntaṃ jagāma |* (「【問】このような言葉の教示があるとき (= 誤った言葉ではなく正しい言葉を教える形で言葉が教示される時)、諸々の言葉の理解のためにそれぞれの語の読み上げがなされるべきではないのか。[すなわち、] *gauh* 「牛が」、*aśvaḥ* 「馬が」、*puruṣaḥ* 「人が」、*hastī* 「象が」、*śakunih* 「鳥が」、*mṛgaḥ* 「鹿が」、*brāhmaṇaḥ* 「婆羅門が」というこのような類いの諸々の言葉が読み上げられるべきである。【答】 そうではない、と答える。このように諸々の言葉の理解のためにそれぞれの語を読み上げることは、[言葉の教示の] 手段とはならない。次のように聞いているから。ブ

バトージは *iyám vyākṛtā vāg udyate* 「この [我々の] 言葉は形成された形で話されている」の *iyám* を *eṣā* と読むが、主意は変わらない。彼によれば、なぜそうなのかは判然としないが、この一文も、馬祀祭の規定と同様に言葉の知識を前提として言語使用がなされる時果が生ずること、もしくは魔神たちの逸話と同様に果は知識ではなく言語使用により生ずることを暗に示すものである。

3 誤った言語使用に起因する咎

3.1 祭式の内側

3.1.1 魔神の逸話

バトージの見解では、人は正しい言語使用により功德を得ると同様、誤った言語使用により咎・罪悪 (*pratyavāya*, *adharmā*) を負う。このことは、誤った言語使用により滅び去った魔神たちの逸話が示唆するところでもある (§2.2.2)。彼は、模倣語 (*anukaraṇaśabda*) の使用や誤った言葉に関する知識から咎・罪悪が生じるか否かという諸問題を俎上に載せた後 (ŚK [26.16–27.12])¹⁶、咎・罪悪は誤った言葉を使用したときのみ生じることを結論する。そして続けて、誤った言葉遣いが避けられるべき領域の話を開始する。

ŚK (27.12–14): *tasmāt sarvathāpi gāvyādiprayoge pratyavāya iti sthitam | tatraiva bhāṣye siddhāntitam yājñe karmaṇy evāyam | na mlecchitavā ity asya kratuprakaṛaṇe pāṭhāt |*

それ故、*gāvī* などを使用するとき咎を被るということが全面的に定立している。まさにそのことについて「祭式行為中においてのみこれ (誤った言語使用に起因する咎) はある」[ということ] が *Bhāṣya* において定説として述べられている。「[婆羅門は] 野蛮な言葉遣いをしてはならない」というこれは、祭式の文脈で表明されているから。

リハスパティはインドラのために、1000 神年の間、言葉の一つ一つ述べて言葉の通し朗誦を実行した。[しかし] 終わりに達しなかった。プリハスパティが教示者、インドラが学習者、1000 神年が学習時間であったが、終わりに達しなかったのである」)

問題の TS 6.4.7.3 に対しては、Kieth 1914: II.534、Scharfe 1977: 80、Thieme 1982–1983: 23–24 (§§3–4)、Cardona 1997: 569 などに訳や解説があるが、Thieme のそれ (下記参照) に最も妥当性があるように思われる。バトージが与える解釈も Thieme のものと合致する (§4 を見よ)。当該の神話に対するサーヤナ (14 世紀頃) の解釈は Cardona 1997: 570 に説明されている。

vi-ā-kr および *vyākaraṇa* の意味に対する精察は Thieme 1982–1983: 23–28 および Cardona 1997: 565–572 (paragraphs 846–848) にある。川村 2017a: 11 (§0.3.3) では後者の解釈をまとめている。Thieme は *vi-ā-kr* の意味について次のような分析を示す。Thieme 1982–1983: 24.10–14: “TS 6.4.7.3 seems to give a clue how *vyā + kr*, from which is derived post-vedic *ākṛti*-f. ‘form’, *ākāra*-m. ‘shape’, came to be used in the sense of ‘forming’. Originally, it must have meant ‘to drive asunder and thereby ‘unfold’’. That’s why Indra in order to ‘drive asunder’ and thereby ‘form’ speech, had to step in the middle (inside) of it.” この見解は、文 (*vākya*) から語 (*pada*) を、語から語基 (*prakṛti*) と接辞 (*pratyaya*) を抽出することで文や語を分解して (*vi*)、そこから、語基の後への接辞導入などにより語や文を組み立てていく (*ā-kr*) パーニニ文法学の性格に合う。ただし Thieme 自身は、単語を分析する作業はパーニニ文法の本来的な目的ではなく、むしろその目的は、想定される構成要素から様々な方法で (もしくは特定の仕方) 単語を形成していく作業にあると見ている。Thieme 1982–1983: 11.6–13: “He (i.e., Pāṇini) does not demonstrate how wordforms can be analyzed into their constituent functional elements by methodical deductions and inferences . . . rather, he presupposes these elements and shows in which, sometimes highly complicated, ways they are to be combined. This is why his work is called a *vyākaraṇa*, that is: ‘an instrument by which forms are created in various ways’ or ‘specifically’: *vividhena prakāreṇa* (or: *viśeṣeṇa*) *ākṛtayaḥ kriyante yena*, as I should paraphrase in Sanskrit.”

¹⁶この箇所は文法学派ダルマ論とヴェーダ思想の連絡を見ようとする本稿の目的からは外れるため、煩を恐れてその詳説を省略する。

バトージは「婆羅門は野蛮な言葉遣いをしてはならない」(*na brāhmaṇena mleccitavai*) というパタンジャリが挙げた規定を、祭場のみ関わるものとし、祭式を離れた場面で誤った言語使用をなしても咎はないとする。以下に見るように (§3.1.2)、パタンジャリは、滅び去った魔神らが崩れた語形を使用したのが祭式内か祭式外か Śatapatha-Brāhmaṇa の物語それ自体からは判断し難い中で、それを祭式内と断定している。他方、同じく崩れた語形を使用していたある聖仙団が害を被らなかつたのは、彼らがそのような語形を使用していたのは日常世界においてのみであり、祭式世界では崩れた言葉遣いをしなかつたからとする。このことは、「婆羅門は野蛮な言葉遣いをするべきではない」(*nā brāhmaṇo mleccet*) という Śatapatha-Brāhmaṇa の規定は、祭場にて発話者が害を被らないように設定されるべきものとパタンジャリが考えたことを示している。

3.1.2 聖仙団の逸話

パタンジャリが紹介する聖仙団 Yarvāṇa/Tarvāṇa の逸話は、ヴェーダ祭式の世界 (*voidika*) を離れた場所、すなわち日常生活の世界 (*laukika*) では、誤った言葉（歴史的には中期インド語）を使用しても問題ないことを説述している。

MBh (Paspasā) [I.11.11–14]: *yarvānastarvāṇo nāma ṛṣayo babhūbuh pratyakṣadharmāṇaḥ parāpara-jñā viditaveditavyā adhigatayāthātathyāḥ | te tatrabhavanto yad vā nas tad vā na iti prayoktavye yar vā nas tar vā na iti prayuñjate yājñe punaḥ karmaṇi nāpabhāṣante | taiḥ punar asurair yājñe karmaṇy apabhāṣitaṃ tatas te parābhūtāḥ |*

Yarvāṇa/Tarvāṇa という名の聖仙たちがいた。彼らは真理を直観し、至高なるものと他のものを知り、知られるべきものを知り、[物事の] あるがままの状態を感得していた。そのお方たちは、*yad vā nas tad vā naḥ* 「何であれ我らのものだけが我らのもの」と言語使用がなされるべきときに、*yar vā nas tar vā naḥ* という言語使用をなす。しかし、祭式行為中には、誤った言葉遣いをしない。一方、かの魔神らは祭式行為中に誤った言葉遣いをなした。それ故、彼らは滅び去ったのである。

Yarvāṇa/Tarvāṇa という名の聖仙たちが *yar vā nas tar vā naḥ* という表現を使用した領域は、祭式世界との対比から、日常世界であることが分かる。*d* 音の代わりに *r* 音を用いるのは中期インド語の特徴の一つである¹⁷。この種の崩れた語形を彼ら聖仙たちは祭式の場面で使用することはなかつたが、魔神らは使用してしまったために滅び去ったのである。つまり、誤った言語使用により罪過を被る領域は祭式世界に限定される¹⁸。

この逸話に言及しながらバトージは再度クマーラの詩節 (TV [301.3–4]) を引く。

ŚK (27.14–23): *kratuprayogād bahis tu apaśabdaṃ prayuñjāno na duṣyati | evaṃ hi śrūyate—yarvānastarvāṇo nāma ṛṣayo babhūvuh pratyakṣadharmāṇaḥ parāvarajñā iti | pratyakṣadharmāṇo yogajadharmabalena sāḁṣātkṛtadharmāḥ | atrāyaṃ śruter āśayaḥ—yogina ete viraktyatiśayāl lauki-keṣv artheṣv āgrahavirahena yathā tathāsmākaṃ bhavatu iti vivakṣavo yad vā nas tad vā na iti vaktavye yar vā nas tar vā na ity ūcuḥ | yājñe karmaṇi punaḥ sādḥūn eva prayuktavantā tena yarvānastarvāṇa ityevamrūpām eva sañjñāṃ munayo lebhira iti | bhāṭṭās cāhuḥ*

*stryupāyamānsabhakṣādi puruṣārtham api śrītaḥ |
pratiśedhaḥ krator aṅgam iṣṭaḥ prakaraṇāśrayāt || iti |*

¹⁷Cardona 1990: 7.9–19 および Cardona 1997: 549–550 (paragraph 833) を参照せよ。

¹⁸ただし、川村 2017b: 105, 注 5 でも述べたように、この逸話が教えるのは「日常生活における誤った言語使用が罪過をもたらすことはない」ということであって、このことは「日常世界における正しい言語使用は功德をもたらす」という考えを否定するものではない点に留意すべきである。

他方、祭式実践の外側で誤った言葉を使用しても、その人は傷つかない。次のように聞いているから。「Yarvāṇa/Tarvāṇa という名の聖仙たちがいた。彼らは真理を直観し、至高なるものと下位のものを知り—」と。「真理を直観している」とは、ヨーガから生まれる功德の力により、真理を直観している [という意味である]。

ここで、聖句は次のことを意図している。これらヨーガ行者たちは、卓越した無執着の心により、世俗的な物事に関し強情さを離れて、「あるがままに我らのものはあれ」ということを言おうとした際、*yad vā nas tad vā naḥ* と言うべきであるのに *yar vā nas tar vā naḥ* と口にした。祭式行為中には、しかし、諸々の正しい [言葉] だけを使用した。それ故、まさに *yarvāṇa/tarvāṇa* というこのような語形を有する名称を聖仙らは得た。

バッタ派の者たちも言っている。

女性に近づくことや肉を食べることは、人のためであるとしても、それらに依拠する禁止は、文脈に応じて、祭式の従属要素であると認められる。

最後に引用される詩節は、本来は *x* のためになされる行為であっても、その行為に対する制限 (*niyama*) や禁止 (*pratiśedha*) は、文脈が違えば *x* とは異なる *y* に資するものになることを具体例をもって示したものである¹⁹。すなわち、女性に接近することや肉を食べることは人に資する (*puruṣārtha*) 行為であるが、それらに対する禁止が祭式の文脈で規定されるならば、女性に接近しないことや肉を食べないことは人ではなく祭式に従属するもの (*aṅga*)、祭式に資するもの (*kratvartha*) となる。同様に、*yar vā nas tar vā naḥ* といった類いの俗語の使用は、日常生活を送る人に資するものであるが、ひとたび「婆羅門は野蛮な言葉遣いをするべきでない」という言語使用に関する禁止規定が祭式の文脈で与えられると²⁰、「誤った言葉遣いをしないこと」は人ではなく祭式のためのものと理解される。このことは、誤った言葉遣いが有害なものとなるのは祭式世界においてであり、日常世界ではそうはならないことを含意する。

ここでパトージがクマーリラの理論に依拠して、Śatapatha-Brāhmaṇa に現れる規定「婆羅門は野蛮な言葉遣いをするべきでない」を、言葉の誤用は使用者だけでなく祭式それ自体にも害を及ぼすということを示すものとして解釈しようとしていることに注意したい。パトージにとって、誤った言語使用は人も祭式も傷つけるものである (§3.2)。祭式世界における誤った言葉の使用が使用者に咎を負わすことは、魔神の逸話に対するパタンジャリの聖典解釈により確定されている (§3.1.1)。

3.2 祭式の外側

他方パトージは、祭典の場だけでなく日常生活の場での誤った言葉遣いも罪過をもたらすとする者たちの見解も紹介している。

ŚK (27.24–26): *apare tv āhuḥ | krator bahiḥ prayoge 'pi puruṣaḥ pratyavaiṭī | teṣām ayam āśayaḥ—nānṛtaṃ vaded ity anārabhyādhītaḥ puruṣārtho 'pi niśedhas tāvad astīti nirvivādam |*

¹⁹当該詩節の直前にクマーリラは次のように論定している。TV (300.37–301.1): *na hi yadarthe karmaṇi yau niyamapraśedhau tāv eva kevalau tadarthau bhavataḥ |* (「*x* を目的とする行為に対する他ならぬ制限や禁止は、単に *x* を目的とするものにはならないから」)

²⁰魔神の物語に託して当該の禁止規定を与える Śatapatha-Brāhmaṇa の箇所は、*jyotiṣoma* (光の讃称) 祭の文脈に位置している。TV (300.17–18): *jyotiṣomaprakaraṇagatabrāhmaṇaśabdalaḥṣitatadapūrvasādhana-yajamānasamśkāratvāt *sādhuśabdabhāṣaṇaniyamasya |* (「正しい言葉を語ることへの制限は、*jyotiṣoma* 祭の文脈に属する *brāhmaṇa* という語が示唆する、その [祭式] の新得力を実現する祭主を浄化するものであるから」) *写本 3 (M3) および写本 5 (M5) が支持する読みを採用した。異読 *sadhubhāṣaṇaniyamapūrvasya* は意味をなさない。

一方、他の者らは言っている。祭式の外側で「正しくない言葉を」使用しても、人は咎を被る、と。彼らは次のことを意図している—「虚偽を語るべからず」という、祭式過程とは関係なく学ばれる、人のための禁止規定も、その限りで存在することに異論はない。

ここで問題となっているのは、新月満月祭 (*darśapūrṇamāsa*) における祭主の齋戒 (*vrata*) を定めた *Taittirīya-Saṁhitā* 中の一節である。

TS 2.5.5.6 (I.209.14–17): *tásyaitád vratám: nānṛtaṃ vaden ná māṁsám aśnīyān ná strīyam úpeyān nāsya pālpūlanena vāsaḥ pālpūlayeyur, etád dhī devāḥ sárvaṃ ná kurvānti ||*

その者には以下の齋戒がある。虚偽を語るべきでない。肉を食べべきでない。女性に近づくべきでない。人々は彼の衣服をアルカリ液で洗うべきでない。なぜなら、この一切を神々はなさないから。

シャバラによれば、*Mīmāṁsāsūtra* 第3巻第4章第4論題である「行為主体」(*kartṛ*) 論題において、当該の「虚偽を語るべからず」という齋戒は新月満月祭の式次第の一部をなすものなのか (*kratvartha*)、それとも祭式の文脈を離れた人間一般の義務なのか (*puruṣārtha*)、という問題が検討課題とされている。ミーマーンサー学派の定説は前者であり、既述の「女性に近づかないこと」や「肉を食べないこと」が祭式に資するものであるのと同様、「虚偽を語らないこと」も祭儀のための禁止事項である²¹。バットージが上で論及しているのは後者の説をとる者たちの見解であろう。彼らにとって、「虚偽を語らないこと」は祭場だけに限定されない人間個人の義務であり、このような義務の規定は、日常世界において虚偽を語ることが話者に咎を負わせることを前提としている。

ここで言う「虚偽を語ること」の意味を明確にすべくバットージは、TS 2.5.5.6が述べる虚偽に言葉の点での虚偽 (*śabdānṛta*) と意味内容の点での虚偽 (*arthānṛta*) の二種を設定して、誤った言葉遣いを前者にあてはめる。このような虚偽の二分類も十中八九クマーリラの議論に着想を得たものである。

TV (303.4–7): *satyaṃ ca dvividham | śabdāsatyam arthasatyam ca | tatra yathaiva yathāvasthītāvīplutārthavacanam śreyaḥśādhanam evaṃ yathāvasthitaśabdāsatyavacanam api | yathā cārthasatyaviparyayaḥ pratyavāyāya | evaṃ viniyogakālaprayuktaśabdānṛtavacanam api | śabdāsādhutvajñānam ca vyākaraṇābhivyogaviśeṣād ity uktam |*

そして、真実には二種ある。言葉の点での真実と意味内容の点での真実である。そのとき、ちょうど、逸脱なきあるがままの意味内容を語ることが幸福を実現するものであるのと全く同様に、言葉の点でのあるがままの真実 (= 正しい言葉) を語ることも [幸福を実現するものである]。また、ちょうど、意味内容の点での矛盾が咎を結果するのと同様に、[祭文] 適用の際に使用される言葉に関して虚偽を語ること (= 誤った言葉を使用すること) も [咎を結果する]²²。そして、言葉の正しさに関する知識は文法学に対する特別な鍛錬に基づく、ということはずでに述べた。

ŚK (27.26–28): *tatra niṣedhyam anṛtaṃ dvividhā—śabdānṛtam arthānṛtaṃ ceti | śabdasyārthasya vā viparūtapratipattihetubhūtam uccāraṇam anṛtavadanam | evañ ca yathārthānṛtaṃ vadataḥ pratyavāyāyā tathā śabdānṛtam apīti tulyam |*

²¹吉水 2007; 2015: 28–29, 注 91 および Yoshimizu 2012a: 555–560 with note 12 を参照せよ。

²²結論部で述べるように、クマーリラによれば、言葉の誤用は祭式を台無しにするが発話者に咎を負わすことはないから、ここで言われている咎が結果する先は祭式と考える必要がある。

そこで禁止されるべき虚偽には二種ある。言葉の点での虚偽と意味内容の点での虚偽である。言葉もしくは意味内容に関して誤ったものを理解させる原因となる発声が、虚偽語りである。そしてこのような場合、意味内容の点で虚偽を語る者が咎を被るとの同様に、言葉の点で虚偽 [を語る者] も [咎を被る]、という共通の事柄がある。

このような解釈を Taittirīya-Saṁhitā の句に施すことで、「他の者たち」の見解のもと、バトージは、言葉の点での虚言、すなわち誤った言葉遣いが祭式だけでなく人にとっても有害であることを当該の聖句によっても根拠づけようとしているのである²³。日常生活の場で言葉の誤用が話者に咎を負わせるのなら、祭式の聖域でもそうであることは自明である。

日常世界における誤った言語使用から害を被るのはその使用者のみであるが、祭式世界ではそうはいかない。祭場での崩れた言語使用は話者だけでなく祭式自体も傷つける (§3.1.2)。バトージは以下のようにまとめている。

ŚK (27.29–30): *kratumadhye punar apabhāṣaṇe puruṣo 'pi pratyavaiti kratuṛ api viguṇa iti vacanadvayabalāt siddhyatī dik |*

一方、祭式の途中で誤った言葉遣いがなされるとき、人も咎を被り、祭式も欠陥を抱える。このことが二つの言明の力から成立する。以上が指針である。

ここでバトージが言う「二つの言明」(*vacanadvaya*)とは、議論の流れから、Śatapatha-Brāhmaṇa の「婆羅門は野蛮な言葉遣いをするべきでない」(*nā brāhmaṇo mlecchet [brāhmaṇena na mlecchitavai]*)と Taittirīya-Saṁhitā の「虚偽を語るべきでない」(*nānṛtaṁ vadet*) の二つと考えられる。特定の祭式の文脈で与えられるこれら二句のうち、前者は祭場における誤った言葉遣いが言語使用者にも祭式にも有害であることを示唆し (§§3.1.1–3.1.2)、後者は祭場における誤った言葉遣いが言語使用者に咎を負わせるものであることを示唆して前者の第一の点を補強する。

4 知識に対する文法学への制限

最後にバトージは、再び Taittirīya-Saṁhitā の一節 (§2.2.3) を引き、言葉の正しさに関する知識は文法学に基づくものであるべきことを宣明して、彼のダルマ論を閉じている。

ŚK (27.31–33): *yathā ca prayoge sādḥnāṁ niyamas tathā sādḥtvajñāne 'pi vyākaraṇasya niyama evety avadheyam vyākṛtā vāg udyata iti prāguktaśruteḥ | vyākṛtā vyākaraṇasamskṛteti hi tadarthaḥ |*

そして、言語使用に関して諸々の正しい [言葉] への制限があるのと同じように、[言葉の] 正しさの知識に関しても文法学への他ならぬ制限がある。このように確定されるべきである。「形成された形で言葉は話されている」という先述の聖句に基づいて。なぜなら、「形成された形で、つまり文法学を通じて正しく構成された形で」というのがその [聖句] の意味であるから。

「言葉は形成された形で話されている」(*vyākṛtā vāg udyate*) という Taittirīya-Saṁhitā の文言は、バトージにとり、「言葉は文法学を通じて正しく構成された形で話されている」(*vyākaraṇasamskṛtā vāg udyate*) と同義である²⁴。文法学により正しく構成された言葉とは、文法学により正しさが確定された言葉である。このように解釈されるとき、当該の聖句は、「正しさ」の基準をどのように

²³祭式における言葉の誤用が発話者に咎を負うことは、パタンジャリの解釈に従えば、魔神の逸話に現れる聖句「婆羅門は野蛮な言葉遣いをするべきでない」がすでに示すところである (§3.1.1)。

²⁴*samskāra* の語感については Thieme 1982–1983: 13–15 (§§19–22)、Cardona 1997: 557–564 (paragraphs 838–844)、後藤 2001: 37–38 (§11) を参照せよ。インド文法学伝統は、文法学的議論の文脈において、*saṁ-(s)kr*

設定するかにより変わり得る「言葉の正しさに関する知識」を、文法学に基づくそれに制限していることになる。つまり、ある言葉が正しいということはその言葉が文法学に従っているということではなければならないことを、この聖句は示教しているのである。「言葉は文法学により正しく構成された形で話されている」とは、文法的知識により正しさが確定された上で言語使用がなされていることに他ならない。

なお、文法学が言語の知識に制限を与えることは、すでにクマーリラが表明している。

TV (303.20–21): *tena vedāvagatasamyagjñātasādhuśabdaprayogātmakadharmāṅgatvena vyākaraṇaprakriyetikartavyatayā nityavācakaśabdarūpajñānanīyamaḥ kriyate |*

それ故、正しく知られた正しい言葉の使用を本質とする、ヴェーダから理解される儀礼行為（*dharmā*）の従属要素として、文法学の派生手続きの方法により、常に意味を表示する言葉（＝正しい言葉）の語形の知識に対する制限がなされる²⁵。

5 結論

バットージは、カーティアーヤナが定めた文法学派の公理の妥当性、すなわち功德の積重と繁栄の獲得は文法的知識を前提とした言語使用に基づくということの妥当性を、ヴェーダ聖典の文句や聖典解釈学派の諸理論を駆使して証明していく。望ましい果は知識に裏づけられた行為によりもたらされるという構造は、すでにクマーリラが指摘したように、*Taittirīya-Saṁhitā* が与える馬祀祭の規定などに観察される。知識ではなく行為こそが果を生むという思想は *Śatapatha-Brahmaṇa* が語る魔神の逸話にも間接的に示され、知識が行為に従属することはミーマーンサー学が提供する論理により保証される。

正しい言葉遣いの前提となる正しい言葉の知識を授けるのが文法学であることを証明する前に、バットージは、誤った言語使用が有害なものとなる領域とそれが害を及ぼす対象を論じ始める。日常世界での言葉の誤用も話者に咎を負わせるものであることをバットージは否定しないが、当該の誤用が有害となるのは、パタンジャリやクマーリラが明らかにするように主として祭事儀礼の場面である。では、崩れた言葉遣いが害を与えるのは人か祭式か。バットージによれば、両方である。前者がそうであることは、魔神らが滅び去った原因を祭礼中での言葉の誤用と見るパタンジャリの聖典解釈により示され、この見解は聖句「虚偽を語るべからず」に対する「他の者たち」の解釈を利用することで補強される。後者がそうであることは、誤った言語使用を禁ずる規定を祭式に資するもの（*kratvartha*）と見ることを促すクマーリラの理論から導かれる。祭事教学ミーマーンサーに対するバットージの造詣の深さに疑いはないが、祭場での誤った言葉遣いが祭式だけでなく発話者にも害を及ぼすという思想は、本稿で扱った箇所では唯一クマーリラの思想と異なる。クマーリラによれば、祭事における虚言は、祭式に欠陥をもたらす新得力の発生を妨げるが（*darśapūrṇamāsāpūrvam eva vaigūṇyān na syāt*）、発話者に咎を負わすことはない（*na tu*

からの派生語の代表的意味の一つに、語基と接辞の区分などを通じた言葉に対する文法的派生説明をあてる（Cardona 1997: 561–564 [paragraphs 842–844]）。文法学に基づいて言葉を派生説明する作業は文法学に基づいて言葉を正しく構成する作業に等しい。

なお、*vyākaraṇasamīkṛtā* を「[言葉は] 文法学により浄化された形で」と訳すことも可能である。この場合、派生組織を通じて正しい言葉を正しくない言葉から区別し言葉を清める、というパーニニ文法学の役割を背景に想定できる（cf. Cardona 1997: 557–564 [paragraphs 838–844]、川村 2017: 11 [§0.3.3]; 18–20 [§0.4.1.1]）。パーニニ文法学の派生組織に従って組み立てられた正しい言葉は、正しくない言葉から切り離される点で浄化を受けるのである。*vyākṛta* に「[正しい言葉を正しくない言葉から] 正しく区別する」という意味をあてはめても、TS 6.4.7.3 (§2.2.3) の文脈とは齟齬をきたさない。

²⁵ミーマーンサー学派にとって、意味を表示する能力を持つのは正しい言葉のみであり、誤った言葉に意味表示能力はない。後者の意味は前者との語形の類似性から理解されるに過ぎない。針貝 1975、Cardona 1999: 101–104 (§§4.2–4.3)、吉水 2015: 50 などを参照せよ。

puruṣasyaiva kaś cit pratyavāyah)²⁶。バトージが祭儀における言葉の誤用は話者にも咎を負わずとしたのは、第一にはパタンジャリが示した聖典解釈による。バトージは、文法学の権威パタンジャリと聖典解釈学の権威クマーリラの説を統合し、両権威の顔を立てたと考えられる。

最後にバトージがヴェーダ聖典に依拠して明確化するのとは文法学という学問の位置である。知識を前提とした行為から望ましい果があること、ダルマ論に即して言えば、言葉の知識を前提とした言語使用に基づいて望ましい果があることの確証を、バトージはヴェーダ聖典の中に得た。すでにパタンジャリが、知識を前提とする行為から果があることを示すヴェーダの事例のいくつかを引いている(馬祀祭の事例とは事なる)²⁷。パタンジャリがやり残した課題は、言葉の正しさに関する知識を授けるのが文法学でなければならないことをヴェーダ聖典の言葉から証明することであった。バトージは、*Taittirīya-Saṁhitā* に現れる聖句「言葉は形成された形で話されている」(*vyākṛtā vāg udyate*) に「言葉は文法学を通じて正しく構成された形で話されている」(*vyākaraṇasaṁskṛtā vāg udyate*) という解釈を施すことで、これを達成する。文法学を通じて正しく構成された言葉とは文法的知識を通じて正しさが確定された言葉である。このように解釈されるとき、TS 6.4.7.3 が語る神話は、文法学の知識に基づく正しい言語運用が神代の昔から続くことを示すものとなる。クマーリラによれば、まさに当該の聖句は、文法的知識に基づく言語活動の常住性を語るものに他ならない²⁸。

ここに、文法学という学問が人を願わしき果の獲得へ導くものであることが、神聖なるヴェーダの言葉に支持された。バトージは、クマーリラが *Tantravārttika* 「文法学章」(*vyākaraṇādhikaraṇa*) にて展開した重厚長大な議論を換骨奪胎し、文法学派ダルマ論の公理をヴェーダ聖典によって裏づけること、権威づけることに成功したと言えよう。

略号及び参考文献

MBh: Patañjali's *Mahābhāṣya*. See Abhyankar 1962–1972.

ŚB: *Śatapatha-Brāhmaṇa* (Mādhyandina-recension). See Weber 1855.

ŚBh: Śabaravāmin's *Śābarabhāṣya*. See Kataoka 2004.

ŚK: Bhaṭṭoji Dīkṣita's *Śabdakaustubha*. See Nene 1929.

TS: *Taittirīya-Saṁhitā*. See Weber 1871–1872.

vt.: Kātyāyana's *vārttika*. See Abhyankar 1962–1972.

TV: Kumārila's *Tantravārttika*. See Harikai 2011.

Abhyankar, Kashinath Vasudev

1962–1972 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali: Edited by F. Kielhorn. Bombay Sanskrit and Prakrit Series 18–22, 28–33. 3 vols. Bombay: Government Central Press, 1880–1885. Third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by K. V. Abhyankar. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1962–1972.*

²⁶cf. 吉水 2007: 814, 注 24; Yoshimizu 2012a: 557, note 18. クマーリラは言葉の誤用により祭式が欠陥を抱えることを次の箇所でも明言している。TV (297.26–27): *yājñe ca karmaṇy apaśabdair bhāṣamānasyānṛtam iva vadataḥ pratiśiddhācāraṇanimittakratuivaiguṇyaprasaṅgaḥ* | (「そして、祭式行為中に誤った言葉で話す者には、虚偽を語る者と同様、禁止された振る舞いを因として祭式が欠陥を抱えてしまうことが帰結する」)

無論、*Śatapatha-Brāhmaṇa* が課す禁止規定「婆羅門は野蛮な言葉遣いをするべきでない」も、クマーリラにとっては、祭式儀礼の従属要素 (*karmāṅga*)、すなわち祭式儀礼それ自体のためのものである。TV (279.11–13): *yo 'pi ca jyotiṣṭomaprakaraṇe vājasaneyinām tasmād brāhmaṇo na mlecched iti pratiśedhaḥ karmāṅgatvena jñāyate so 'pi . . .* | (「jyotiṣṭoma 祭の文脈における、Vājasaneyin 派の『それ故、婆羅門は野蛮な言葉遣いをするべきでない』という、祭式の従属要素として知られる禁止規定も . . .」)

²⁷川村 2017b: 108–109 (§4.3.1.1) を見よ。

²⁸TV (304.28): *tasmād eṣā vyākṛteti ca vyākaraṇavyavahāranityatvam uktam* |

- Akamatsu, Akihiko (赤松 明彦)
 1994 「バルトリハリにおける *abhyudaya* と *niḥśreyasa*—文法学は何のために学ばれるのか—」『哲学年報』53: 1–24.
- Aklujkar, Ashok
 2004 “Can the Grammarian’s *dharma* Be a *dharma* for All?” *Journal of Indian Philosophy* 32: 687–732.
- Amano, Kyōko (天野 恭子)
 2016 「祭式を裏付ける「知識」を巡って—古ヴェーダ祭式文献における *yá evaṁ vidvān / veda* の使用法と哲学思想の発展—」『待兼山論叢』50 (哲学編): 26–56.
- Bronkhorst, Johannes
 2008 “Innovation in Seventeenth Century Grammatical Philosophy: Appearance or Reality?” *Journal of Indian Philosophy* 36: 543–550.
 2012 “Bhaṭṭoji Dīkṣita and the Revival of the Philosophy of Grammar.” In *Samśkrta-sādhutā, Goodness of Sanskrit: Studies in Honour of Professor Ashok N. Aklujkar*, ed. Chikafumi Watanabe, Michele Desmarais, and Yoshichika Honda, 54–85. New Delhi: D.K. Printworld.
- Cardona, George
 1990 “On Attitudes Towards Language in Ancient India.” *Sino-Platonic Papers* 15: 1–19.
 1997 *Pāṇini: His Work and its Traditions. Volume One. Background and Introduction*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1988. Second edition, revised and enlarged, 1997.
 1999 “Approaching the *Vākyapadīya*.” *Journal of the American Oriental Society* 119-1: 88–125.
- Gotō, Toshifumi (後藤 敏文)
 1987 *Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen: Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpäsen-tia*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
 1989 「*vācārambhaṇaṃ vikāro nāmadheyam*」『インド思想史研究』6: 141–154.
 2001 「サッティヤ *satyā*- (古インドアーリア語「實在」) とウーシヤ *ousia* (古ギリシャ語「実体」)—インドの辿った道と辿らなかった道と—」文部科学省科学研究費特定領域研究 (A) 「古典学の再構築」『ニューズレター』9: 26–40.
- Harikai, Kunio (針貝 邦生)
 1975 「*Sādhuśabda* をめぐって」『印度学仏教学研究』23-2: 1037–1045.
 1990 『古典インド聖典解釈学研究—ミーマーンサー学派の積義・マントラ論—』福岡：九州大学出版会
 2011 “Sanskrit Text of the *Tantravārttika*, Adhyāya 1, Pāda 3, Adhikaraṇa 9, Vyākaraṇa Adhikaraṇa, Collated with Five Manuscripts.” *South Asian Classical Studies* 6: 267–304.
 2015 「マハーバーシュヤ第一日課 (*Paspaśā-Āhnika*) とタントラヴァールツェイカ」『比較論理学研究』12: 21–37.
- Hokazono, Kōichi (外蘭 幸一)
 1994 「祭式主義の倫理 (アタルヴァ・ヴェーダ及びブラーフマナの倫理観)」『鹿児島経大論集』35-3: 43–94.
- Houben, Jan E. M.
 2008 “Bhaṭṭoji Dīkṣita’s “Small Step” for a Grammarian and “Giant Leap” for Sanskrit Grammar.” *Journal of Indian Philosophy* 36: 563–574.
- Ito, Michiya (伊藤 道哉)
 1982–1983 「Mīmāṃsā 学派の *puruṣārtha*」『印度学仏教学研究』32-2: 696–697.
- Jhā, Gaṅgānātha
 1903–1924 *Kumārila Bhaṭṭa. Tantravārttika. A Commentary on Śabara’s Bhāṣya on the Pūrvamīmāṃsā Sūtras of Jaimini*. 2 vols. Calcutta, 1903–1924. Second edition, Delhi: Sri Satguru Publications, 1983.
- Joshi, S. D. and J. A. F. Roodbergen
 1986 *Patañjali’s Vyākaraṇa-Mahābhāṣya: Paspaśāhnika, Introduction, Text, Translation and Notes*. Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit Class C; No. 15. Pune: University of Poona.
- Kataoka, Kei (片岡 啓)
 2004 『古代インドの祭式行為論—Śābarabhāṣya & Tantravārttika ad 2.1.1–4 原典校訂・訳注研究』東京：山喜房佛書林
 2011 『ミーマーンサー研究序説』福岡：九州大学出版会

- Kawamura, Yūto (川村 悠人)
 2017a 『バツティの美文詩研究—サンスクリット宮廷文学とパーニニ文法学—』京都：法蔵館
 2017b 「初期文法学派のダルマ論序—日常世界と祭式世界における知行」『比較論理学研究』14: 103–118.
- Keith, Arthur Berriedale
 1914 *The Veda of the Black Yajus School Entitled Taittiriya Sanhita*. Harvard Oriental Series 18–19. 2 vols. Cambridge, Massachusetts: The Harvard University Press.
- Koyama, Norio (小山 典勇)
 1979 「殺婆羅門の一考察」『印度学仏教学研究』27-2: 700-703.
- Nene, Pandit Gopal Śāstri
 1929 *The Śabda Kaustubha by Pandit Bhattojīdīkshī*. Vol. II-Fas. 5 to 10. From the second Pāda of 1st Adhyāya to second Pāda of 3rd Adhyāya and Sphota Chandrikā by Pandit Srikrishna Mauni. Chowkhambā Sanskrit Series, A Collection of Rare & Extra Ordinary Sanskrit Works. Nos. 3 to 10, & 13, 14. Benares: Vidya Vilas Press.
- Oldenberg, Hermann
 1885 “Ākhyāna-Hymnen im Ṛgveda.” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 39: 52–90.
- Ozono, Junichi (尾園 絢一)
 2014 「正しい言葉 (śabda-) —ヴェーダとパーニニ文法学の観点から—」『論集』41: 77–103.
- Scharfe, Hartmut
 1977 *Grammatical Literature. A History of Indian Literature Volume. V, Fasc. 2*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Thieme, Paul
 1938 *Der Fremdling im Ṛgveda: Eine Studie über die Bedeutung der Worte ari, arya, aryaman und ārya*. Leipzig: Brockhaus, 1938. Nendeln: Kraus Reprint, 1966.
 1982–1983 “Meaning and Form of the ‘grammar’ of Pāṇini.” *Studien zur Indologie und Iranistik* 8/9: 3–34.
- Tsuji, Naoshirō (辻 直四郎)
 1970 『現存ヤジュル・ヴェーダ文献—古代インドの祭式に関する根本資料の文献学的研究—』東京：東洋文庫
- Weber, Albrecht
 1855 *The Ṣatapatha-Brāhmaṇa in the Mādhyandina-Ṣākhā with Extracts from the Commentaries of Śāyana, Harisvāmin and Dvivedagaṇa*. The White Yajurveda, part II. Berlin: Dümmler; London: Williams and Norgate, 1855. Reprint, Leipzig: Otto Harrassowitz, 1924.
 1871–1872 *Die Taittirīya-Saṁhitā*. 2 Bde. Indische Studien 11–12. Leipzig: Brockhaus.
 1876 *Akademische Vorlesungen über Indische Literaturgeschichte*. Zweite, vermehrte, Auflage. Berlin: Fred. Dümmlers Verlagsbuchhandlung.
- Yoshimizu, Kiyotaka (吉水 清孝)
 1995 「シャバラスヴァーミンにおける apūrva は「新得力」か? (1)」*Artes Liberales* (岩手大学人文社会科学部紀要) 57: 31–46.
 1996 「目的因としての apūrva—シャバラスヴァーミンにおける apūrva は「新得力」か? (2)—」『インド思想史研究』8: 20–41.
 2000 “Change of View on apūrva from Śabarāsvāmin to Kumārira.” In *Japanese Studies on South Asia No. 3. The Way to Liberation—Indological Studies in Japan—*. Vol. 1., ed. Sengaku Mayeda, 149–165. New Delhi: Manorhar.
 2007 「祭式で虚偽を語ってはならないのは何のためか—定動詞表示と文脈—」『印度学仏教学研究』55-2: 814–820.
 2012a “Tradition and Reflection in Kumārila’s Last Stand against the Grammarians’ Theories of Verbal Denotation.” In *Saṁskṛta-sādhutā: Goodness of Sanskrit, Studies in Honour of Professor Ashok N. Aklujkar*, ed. Chikafumi Watanabe, Michele Desmarais, and Yoshichika Honda, 552–586. New Delhi: D. K. Printworld.
 2012b 「クマーリラにおける個体中心の存在論—アリストテレスとの比較による試論—」『インド論理学研究』5: 1–46.
 2015 「クマーリラによる「宗教としての仏教」批判—法源論の見地から—」龍谷大学南アジア研究センターワーキングペーパーシリーズ 25

Bhaṭṭoji Dīkṣita on Scriptural Statements: The Confirmation and Authorization of Grammarians' Theory of dharma by Vedic Thought

Yūto Kawamura

The aim of this paper is to consider the arguments about the grammarians' theory of dharma which are presented in Bhaṭṭoji Dīkṣita's (ca. 16th–17th c. CE) Śabdakaustubha. This is a sequel to Kawamura 2017b, which dealt with the theory at issue developed by early grammarians such as Kātyāyana (ca. 3rd c. BCE) and Patañjali (ca. 2nd c. BCE). In vārttika 9 of the Paspasā: *śāstrapūrvake prayoge 'bhyudayas tat tulyaṃ vedaśabdena*, Kātyāyana sets forth that the use of correct speech forms, preceded by a knowledge of Pāṇinian grammar, results in (merit [*dharmā*] and) prosperity (*śāstrapūrvake prayoge 'bhyudayas*) and that this is in agreement with what the Veda says or with Vedic words (*tat tulyaṃ vedaśabdena*). In the course of discussing his first interpretation of this phrase, *tat tulyaṃ vedaśabdena*, Patañjali demonstrates, by alluding to two scriptural teachings, that the Veda speaks in support of the position declared in the first half of the vārttika cited above: any action (the use of correct words) can bring about a desired result (merit and prosperity) only when preceded by the knowledge that is required to perform the action in question.

Knowledge with respect to the correctness of speech forms (*sādhutvajñāna*), a necessity for carrying out the action of using speech correctly, is to be based on Pāṇinian grammar and not on anything else, as Kātyāyana states (*śāstrapūrvake*). However, neither Kātyāyana nor Patañjali introduced any Vedic evidence to show that this view is actually confirmed by the Vedas. Bhaṭṭoji Dīkṣita accomplishes this remaining task by putting a certain interpretation on the Vedic statement *vyākṛtā vāg udyate* appearing in Taittirīya-Saṃhitā 6.4.7.3, which runs as follows:

TS 6.4.7.3 (204.3–8): *vāg vai pārācy āvyākṛtāvadat, té devā índram abruvann. imāṃ no vācam vyā kurv īti . . . tām índro madhyatò 'vakraṃya vyākarot. tasmād iyāṃ vyākṛtā vāg udyate.*

“Human speech used to speak being turned away (ununderstandably), being unformed (unarticulated). Then the heavenly said to Indra: Do form us this speech . . . Then Indra formed it (gave it different forms, made it articulate), having stepped in the middle of it. Therefore this human speech is spoken being formed (having different forms, being articulate).” (Thieme 1982–1983: 23.34–24.4)

This mythological story is told to explain why the speech human beings use is uttered being formed (*vyākṛtā vāg udyate*). Bhaṭṭoji Dīkṣita glosses the expression *vyākṛtā* with *vyākaraṇasamskṛtā*. Under this interpretation, the scriptural statement *vyākṛtā vāg udyate* comes to mean ‘[This] speech is uttered being properly constructed through [a knowledge of] Pāṇinian grammar’ (*vyākṛtā=vyākaraṇasamskṛtā*). As such this statement can be seen as clear evidence that the Vedas accept that it is Pāṇinian grammar which imparts knowledge as to the correctness of speech forms. For, that a word is properly constructed through a knowledge of Pāṇinian grammar means that the correctness of the word is verified through this knowledge. Bhaṭṭoji Dīkṣita thus succeeds in having the grammarians' theory of dharma fully supported and thereby authorized by Vedic lore.

One may add that Bhaṭṭoji Dīkṣita's discourse on dharma can be said to be a successful adaptation of Kumārila's elaborate arguments advanced in the Vyākaraṇādhikaraṇa of his Tantravārttika.